

A F P Yによる学級集団づくり

課題解決活動を通して自他の認識を深め、仲間意識を育てる
—教科学習を中心に—

中学校 教諭 平井氏

1 A F P Yの教育手法を教科の授業に

中・高校生の理数科離れが心配され、分数計算のできない大学生が話題に上って久しい。小学校から中学校に入学してくると、名称は算数が数学となり、内容も学年が進むにしたがって学問らしくなってくる。数概念の拡張・具体物を介しての思考から抽象的思考へ、そしてより論理的な考え方が求められるようになってくるのである。子どもも教師も間違いの少ない、より完成された答えを短時間に導き出そうと飽くなき努力をしているが、これは数学教育の重要要素の一つとして、求めるべき姿であると思っている。

そんな状況の中、教室の中に目を転じると、数学の得意な子ども不得意な子ども、人前で話すことへの羞恥心や、エラーすることへの恐れから、積極的に自分の考えを述べたり発表することができない様子が見られる。これは、自分が安心していることができる場所（セーフティーゾーン）から出ることができず、無意識的に心の垣根を高くして自分をガードしている状態と考えられる。

そこで、学級集団の中に、信頼感に根ざした温かい人間関係が育っており、エラーをも共有し共に正していこうとする支持的風土が醸成され、互いが最大限に尊重される雰囲気があるならば、このセーフティーゾーンは広げられ、いつのまにか心の垣根も低くなり最初の一步が踏み出しやすくなるのでないかと考えた。

A F P Yはまさにこういった人間関係を構築していく教育手法である。教科の授業においても、一人一人が大切にされ、良好な人間関係が築かれ、最初の一步を踏み出していく冒険心を培うことができれば、自ら課題を解決するダイナミックな集団として成長していくものと考えられる。

2 学びを引き出す不親切な支援

私が勤務するこの中学校は、全校生徒28名という海辺の小規模校である。生徒は純朴で、世間一般で言われているような生徒指導上の問題はほとんどない。平成13年度より、人権教育・道徳・学級活動等でA F P Yの手法を取り入れた授業に取り組んできており、年1回行われる宿泊研修も全日程A F P Yの手法で実施してきた。本校の日常の人間関係は温かい支持的雰囲気に包まれているが、さらに、一步踏み込んだ信頼関係を作りたいと贅沢な思いをもっている。

しかし、数学の授業においては、子どもたちは、常に正解を書いたり発表をしたりしなくてはいけないと思い、セーフティーゾーンから最初の一步を踏み出せないでいた。また、我々教員も”子どもたちに成功体験を”と思うあまり、周到な準備を行い試行錯誤の少ない道筋をつけてしまいがちであった。A F P Yで培われた信頼関係が教科の授業では生かされていなかったのである。

そんな子どもたちに、”エラーをしても良いんだという認識”どエラーはみんなの役に立つという意識”を育てるために、子どもたち自身が試行錯誤を繰り返す場面を意図的に仕掛けた。その仕掛けに見事にはまった後も、安易に手助けをすることなく、看守することに徹することにした。これを私ば不親切な支援”と称するのである。

3 エラーからの学びの共有

意図的に仕掛けられた試行錯誤。そのエラーの瞬間こそが子どもたち自らの学びへ

の冒険の瞬間であると考え、教師はじっと辛抱強く看守る。そんな繰り返しの中、子どもたちの発言が徐々にではあるが出てくるようになった。日頃培った信頼関係と支持的風土が、教科の授業の中でも生かされ、最初の一步が逡巡しながらも踏み出せたのである。解決していくのは自分たちだという意識が芽生え、学級全体で頭を突き合わせ意見を闘わせる会話（ブレインストーミング）が始まる。一人一人の意見が大切にされ、解決に向かって進んでいく。今、そんな様子で数学の授業が展開されている。

4 授業の実際

入学当初

※数学への興味はある

※エラーの許されない雰囲気→確信のある者だけが発言し答える

「間違っているかもしれないから、いやです。」

「こんな考えでも良いんですか？」

1 エラーは捨てられる→「違います。～です。」

エラーから学びへ

○エラーを仕組みエラーを認める→「良い間違い方だね。」

○学びを誘う→エラーを子どもに返す「どうしたらいい？」（トライ）

10個から全体へ→ 個の考えを学級全体でブレインストーミング

〔トライアンドエラーをスパイラルに繰り返す〕

エラーが許されるあたたかい雰囲気

子どもは

※エラーすることを気にせず積極的に発言する

※エラーを自分たちで修復

中学1年生のS子は勉強が苦手で、小学校の時から不得意な科目やプレッシャーを感じる場面では、その場からよく逃避していた。特に算数の授業では、直前に頭痛を訴え保健室で休む傾向にあった。中学校に入学した当初も、苦手意識が強く消極的であった。しかし、エラーを失敗とみなさず学びへのチャンスという意識がクラス全体の雰囲気を変えた。S子自身も間違ふことや解らないことをポジティブにとらえるようになり、授業中の発言が増えてきている。さらに、意欲的に黒板に出て解答を書いている。エラーする事が多いが、そこから新たな学びが生まれ、良い結果に結びついていっている。

5 今後の課題

A F P Y手法を用いて子ども自らの学びを促すには、教師自身の確固たる見通しと、時間にとらわれずに看守る姿勢が肝要となる。そのためには、研修を能率的かつ深化させる教師集団の研修組織を整備することと、限られた教育課程の中で、いずれの教育活動においても目指す学習集団に育てるための智恵の結集を図ることの2点が今後の大きな課題である。

そこで、現在強く求められている意識改革を一人一人が図り、まずは、支持的風土に満ちた教師集団にさらに成長することが責務であると考え。我々教師が目標実現のために費やした時間は、子どもたちの生き生きとした主体的な学習の実現によって、心身ともの余裕を生んでくれるものと信じて励んでいきたい。